

…今に至るまで、パブリックなラカンという考えでした。分析主体にとっての、そしてとりわけセミナーに姿を現わすラカン—こう言ってよければ、素晴らしい、全く驚嘆すべき、とても特異的な、話す才能を持ったラカンのことです。

ミシェル・マンソーという女性ジャーナリストをある時私は講義に連れて行きました。彼女はエクスプレスという雑誌に書いていましたが、セミナーが終わって講堂から出る時には、言わないとならないけど、これはラカンの、一種の墮落ですと言っていました。それは彼女の文体ですが。サッシャ＝ギトリーにとっても似ています・・・

しかしフィリップ・ソレルスのような人物が、—ソレルスは当時の全ての知的な作家を知る人物で、かつ、ひとをからかうのが好きで、たくさんの人を馬鹿にしたりしていますが—ソレルスが、「一度もラカンのセミナーを欠席したことがない」と言っているのは、非常に感動的です。ラカンの毎回の講義にとっても熱心に参加していました。その上、ラカンにインスピレーションをたくさん得ていた時期があるのです。彼の口調、礼儀、そして主題さえもそうです。ですから、セミナーにおいて、素晴らしいラカンが存在し、毎週新しい講義をしていました。一度として同じ講義を繰り返すことはしませんでした。

ソレルスはさらに、ラカンは即興で話している、彼のパロールが跳躍するまま話していると想像していたのですが、それは不正確ですね。

ラカンはプランを持っていました・・・紙の束をもち、セミナーの前にラカンはいろいろ書いていました。時には一つのフレーズで、時には言葉が二つだけだったりしましたが。図式を描いていたり、講義の導きの糸となるようなものを書き留めていましたよ。

ですからおそらく、それらの要素を結ぶために即興的な部分もあったと思いますが、しかしあゆみは予想されたもので、しばしば彼は予想したところまでは到達しませんでした。一部をそのままにして、次の講義で再びそれを取り上げる時は、ゼロから始めて、前の講義の終わりを話し直すことはしませんでした。

そういうわけで、そんなラカンも存在します。それはピューブリックなラカンではありません。彼のセミナーには、患者たちのラカン、が存在していて、ある仕方ではそのラカンもまた素晴らしかったのですが、時折は恐ろしくもありましたね。こう言ってよければ人生よりもさらに彼は偉大だったので。そのラカンというのは、患者たちが転移の効果ゆえに見たものだと、言わなければなりませんね。ですからそれはラカンという人物が一種膨れ上がったものであり、それは一般的には陽性の転移に対応しています。でもときには陰性のものでもあります。

そしてそれこそがパブリックなラカンの土台をなすものです。「ラカン神話」制作の土台、ラカン神話の土台です。また、同僚としてのラカン、というものも存在します。ラカンはその世代や上の世代の同僚たちと一緒にやるのが難しかったと言っても、あなたは驚かないでしょう。

もっと若い生徒たちにとってはもっと事は簡単でした。何も起こらなかったのです。よく同じ学派に属する分析家同志のやり取りは、あまりにも極端に礼儀正しいことが起こるのですが。

ラカンは、何かひとつの点について賛成ではない時、それを相手に知らせることを躊躇いませんでした。友好的な返答しかしないというわけではありませんでした。ですから時にはそのせいで傷つく人たちもいましたが、ラカンはプラトン以上に「真理の友」だったのですね。そういう諺があります。ですからこんなふうにパブリックなラカンには、たくさんの層というものがあります。

それではプライベートのラカンに移りましょう。プライベートなラカンは、本当にとってもプライベートなものです。というのは、彼が生きている間、彼の近親者、家族は沈黙によって彼を取り囲み、彼を守りましたから。家族はラカンに何も聞かなくても、外では彼について話さないことにしていました。ラカンのこと、そして彼の日常生活について、何も口にださないようにしていました。40年間のあいだ、この規律は守られたのです。一方、パブリックなところでは、ラカンの名誉を毀損するようなイメージが、広まったのですね。私が誰のことを指して言っているのか、あなたにわかるでしょうか。そのひとは本当にすばらしい執拗さをもって、ラカンの名誉の毀損にはげんでいました。

それはラカンが亡くなって10数年してから始まりました。それはずっと続きました。ラカンの名前がいろんな理由で新聞に出るたびに、彼の価値を下げるコメントが続いたものです。

しかしそんな状況にもかかわらず、私たちはLacan Redivivusが今日明らかにしている事柄について、押し黙ったままでいました。40年という月日がながれ、それについてあまり私も考えないでいたからこそ、むしろこの沈黙を破るときが来たなど今私は感じたのです。

私の子供たちにとってそれはあまり明らかではありませんでした。例えば、この規律のなかで育った子供たちは、プライベートな要素を公に委ねるというアイデアに、とても驚いていました。子どもたちがこの企画に参加するまでには一定の時間が必要でした。でも私の娘は、この本の制作でとても重要な役割を果たしています。

じつは、その禁止—ラカンのプライベートは口外しない—は、カトリーヌ・ミヨーによってすでに取り

除かれていたものです。「ラカンとともにある人生」を彼女は書きあげました。それは証言で、最良の趣味でなされたものです。主題は本当に扱うのが難しいのですが。彼女がいわば道をひらいたと言えますね。

色んなもののなかで、とりわけ私の胸をうったのは、ラカンが用いている話です。・・・あなたがそのように呼んでいますね。パリにいるグローリアー彼女はクリスチアヌ・アルベルティが思い起こしているように、つねにラカンとともにいました。20 歳か、21 歳からずっと、グローリアはラカンと一緒にでした。

そしてラカンが彼女を刑務所に探しにいったとき、当時まだ2 年しかラカンが彼女を知ってから経っていなかったのですが、ラカンは自分が誰と関わっているのかがわかりました。そして彼女のほうも 1981 年までラカンのところにとどまりました。1981 年の9 月9 日にラカンは亡くなったからです。

ですからパリにはグローリアがいて、みんなにそのことは知られていて、白い狼のように知られていましたが、ドクターラカンの内密なことについて彼女が知ること、それに関しては一度も訊かれたことはありませんでした。ただし、家族をのぞいてです。ラカンの娘であり私の妻である、ジュディットにとっては秘密はありませんし、彼女はミヨーとグローリアのふたりが大好きです。

グローリアは、私に対してはとても慎み深いですが、それでも彼女はよくしゃべりますよ。でも他の人とは彼女はまったく口をききません。そしてジェジュスとアリシアがいて、誰もご存じないふたりだと思いますが、ギトランクールにいるふたりです。そこはラカンの別荘で、毎週末に、ラカンは彼らと会っていました。

たぶん 50 年代は違うでしょうが、私が彼らを知ったのは 1964 年で、それ以降はまったく変わらずにラカンは毎週金曜日の夜、行っていました。もしそれが無理なら土曜日の朝か、より遅くに、ギトランクールに行くための荷物をいろいろ詰めていました。そして日曜日の晩に、多くの場合は交通渋滞に巻き込まれながら一かなり最近になって道が一本できて緩和されましたが一パリに戻っていました。

ヘーゲルのフレーズをご存じでしょうか。「召使にとって、英雄は存在しない」、です。モンテーニュはすでに似たようなことを言っていました。ヘーゲルのあとゲーテもおなじですが、ゲーテはトルストイに反対しております。トルストイは逆に、召使は完ぺきに主人の質やこころの平凡さを観察することができると考えています。とはいえ、ふたりは召使ではなく、サラリーマンですね。

私たちが読みとれることは、ラカンにたいしてふたりが賞賛と親しみを感じていることです。彼らにとってラカンは英雄でした、英雄そのものでした。近くて、友好的で、防御するひとで、善人でした。ヘーゲルの有名なフレーズに反して、です。

ところで異なるモードとしては、グローリアがいます。彼女といえばサン・クルーズ・ド・リルの騒がしさと熱情です。他方、アリシアのほうは静寂と美味しい料理でした。現場で彼女は料理を学んでいました。なぜならそう彼女が言っていたように、彼女が始めたのはやはり 22 歳、23 歳のころで、何も知らなかったからです。彼女はラカンが好きな料理を学びました。ラカンはそれらのメニューの支配人を彼女にまかせていました。

そこへ家族が加わり、かつ分析主体や書店員、クリスチアヌ・アルベルティが加わっています。

それではこのプライベートなラカンは、正統 *authenticité* なのでしょうか、ちがうのでしょうか？ほかにラカンはあるのでしょうか？どんな問いがあるのでしょうか？

私は考えることをやめることができませんね。質問者のある方がこの「正統」ということばを用いたからです。そして私は最初哲学科にいました。ハイデガー、初期のハイデガー、*Sein Unsicht* のハイデガーです。正統ということばは格別な重みを彼の中で持っているからです。

フランクフルト学派の哲学者アドルノがハイデガーの教育を廃止しようと企てたとき、一根本的なそのナチズムを強調して、そしてそれを証明するいくらかの数の発見がなされるよりかなり前の話ですー、ハイデガー主義者によってそのことが論争化していたにもかかわらず、アドルノはそれを企てましたが、彼はまさに「正統」という専門用語のことばのもと、そうしたのでした。

ではこの「正統」、私はドイツ語を脇におくつもりですが、ハイデガーはそれを現存在 *Dasein* と定義しています。それは「実存 *existence*」、「存在 *existant*」として翻訳された「主体」のことではありません。そして純粋なハイデガー主義者は、「そこにある存在 *l'être là*」と訳しています。

つまりすべては「意識」あるいは「精神 *esprit*」と言わないように翻訳されています。ハイデガー主義、純粋なその人たちは、「そこにある存在」と訳したかったのです。どれほど翻訳が難しいか、皆さんわかるでしょう。

ハイデガーは「現存在はもっぱら正統であり得るものである」、つまりそれに固有のあるなにかである、と述べています。現存在はつねに私のもので、私に固有のものをつねに私は把握することができる、あ

るいは失うことができる、あるいは少なくとも忘れることができる、と。サルトルのなかにもハイデガーに読まれたもののひとつのバリエーションが見られます。「存在と無」にありますね。

そして不誠実な分析は、ハイデガーが非正統と呼ぶものと関係がないわけではありません。じつは、ハイデガーにとって正統とは、存在するひとつのモード、実存するひとつのモード、私ははしょって言いますが、自己実現のひとつの理想と私が呼べるだろうもののことです。この意味においてこそ、あるひとが正統的であると、言うことができるのです。

「あるひとが正統である」と言われるときは、その人物が、いつわりの見かけで姿をあらわしていないときです。そのひとがしていること、考えていることにおいてそのひとがいる場合で、心理的な留保がないときです。彼自身にたいして現存していて、それにより、結局、ラカン派が「欲望」と呼ぶものを実現するときです。

じつは、ラカンは自分は精神年齢が5歳であると話していて（笑）、彼はエディプスコンプレックスの終わりより前の年齢を選んでいます。その時期、まさに抑圧や、欲望の人間化が結実するのですが。ラカンはですからどこか野蛮で、交渉不可能な要請のなにかを保持しているのです。そしてその年齢は父の像という観点では、尊敬を打ち立てるより以前の年齢です。それがラカンの選択でありラカンによる参照です。この意味において、そうです、私はラカンが正統であると思います。彼の敵対者、敵でさえ、全員、ラカンのなかに正統を認めていると思います。

「正統的に意地悪である」とか、「正統的に悪い」、「正統的に倒錯である」と述べるのが可能だというひとがいるかもしれません。しかしラカンが正統であったという事実に疑いをはさむ人はいません。すでに長々と、正統なラカン、という、あなたが私に引き起こした問いについては答えましたね。手稿とそれについての関心については、削除されたところとか、ラカンによって「よく言う」ことを探究しながらやりました。かなり最近できた規律＝学問があるのを思い起こします。学問は発達していて、それは「génétique des textes テキストの発生、テキストの遺伝学」と呼ばれるものです。それは多くの大学人たちを生かしているものですが、まさに文学作品の成り立ちや、さらに書かれたもの、あらゆる種類の書かれたものを、決定版よりも以前の状態から出発して研究するもののことを指しています。

パソコンの導入はあらゆるこの産業を困らせた、いまでも困らせていると言わないなりません・・・(略) 詩人のポンジュは、テキストのファブリックについて話しましたが、とくに非常に短いテキストの多様な版にその生涯の最後の時期を捧げました。彼自身が決定稿よりまえの版を生み、それによってひとつの本を作ったのです。ですからある仕方において、作品を世俗化しています。（つづく）